

論壇 Bookmark

ブックマーク

「浪人」や「悪党」の名で日本史に登場するアウトローたち。村落共同体の貴重な労働力として重宝されていた時期もあったが、13世紀になると村との関係性に亀裂が走る。日本中世史の専門家は「気候変動」からその変化を読み解く。

日本史には、確かに公的な課税を負わない「浪人」(浮浪人)や、既存の支配者に従わない「悪党」と呼ばれる人々が存在した。だが、13世紀までの浪人は、農地を開墾する労働力として村に招き入れられる存在だった。そんな関係性が変化し、浪人が村から排除され、鎌倉幕府からは悪党予備軍と見なされるようになる。その背景には、当時の気候変動とそれに伴う飢饉がある。国立歴史民俗博物館助教の土山祐之さん

村落の労働力関係性に変化

黒澤明の名作「七人の侍」は戦国時代が舞台とみられ、作中のせりふにも「天正」という元号が出てくる。略奪に苦しむ百姓たちが、7人の侍を雇って野武士の襲撃から村を守る。村の外にいる者は、ルールに従わず共存できない危険な存在だという印象が強い。



国立歴史民俗博物館助教の土山祐之さん 本人提供

今回の論考

土山祐之

「13世紀における浪人の変容と気候変動
領主・村落とのかわりから」
(歴史学研究4月号)

推薦した 論壇委員

鶴見太郎

東京大学准教授

歴史・国際

中世、浪人を「悪党」に変えた気候変動

こうした見方の裏付けとなったのは、中塚武・名古屋大学教授(古気候学)らの研究だった。木の年輪に含まれる酸素のわずかな違い(年輪酸素同位体比)を分析し、過去数千年にわたる夏の気温や降水量の変化を、年単位で高精度に復元できるというもの。「世界をリードする研究」(土山さん)だという。

数百年スパンの不作なら備蓄があれば持ちこたえられる。でも、比較的長期の安定を経て急に寒冷化するような、数十年周期で発生する極端な気候変動になると、村の古老も未体験で、大飢饉になるという。

(大内博史)

数十年周期の変動で飢饉？

は指摘する。「雨が降りすぎれば洪水。降らなければ日照り。どちらにせよ生産不順で食糧不足となり、村落と浪人や山野河海の恵みを奪い合う事態が起きました」。

村や山野河海から浪人を排除する過程で、村は排他性を強め、自治の性格が強い「悪党」へと変化していくのではないかと、というのが土山さんの見方だ。

数千年周期の変動で飢饉？

研究から浮かび上がるのは、度重なる災害や環境の変化が列島に住む人々の生活を変えてきたという点だ。「先人たちは災害や環境の変化に適応し続けてきました。今後、その事態を研究していきたい」。今の職場でも共同研究を進めている。

研究は現在を読み解く手がかりにもなる。「異常気象が一因なら、昨年来のコメ不足は容易に解決しない可能性も」と結論づけています。

◆本誌ニオン面で毎月掲載する「論壇時評」のため、論壇委員会が開かれています。委員が推薦する論考を1本選んで、詳しく紹介します。

村を襲う悪党たち

これは、ある日(2025/05/23)の朝日新聞の朝刊に載った論稿です。「農村の歴史」についての意見です。気候変動によって農村が大飢饉になると、これまで定住する村のない人たちを招いて入植者として仲間に入れていたが、その人たちを追い出すことになる。彼らは浪人や悪党となって村々を襲うようになり、穀倉であるべき農村が凋落し、国全体が食料不足に陥るといいます。自然災害が、共同体である農村や農民に排他性を生み、国民の生活を変えてきたと述べ、「異常気象が一因なら、昨年来のコメ不足は容易に解決しない可能性も」と結論づけています。

それは、そうかもしれません。でも、この悲観的で希望のない結論は残念です。実は、この論稿の論旨は、二宮尊徳の活動記録である『報徳記』にも書かれていることです。そこには、飢饉などの自然災害で困窮した農村を、どう、復興するかが詳しく書かれていて、

特に、外部から来た農民や浮浪の民(『報徳記』では「来民」といいました)の扱い方についても恩情のこもった施し方が述べられています。

以下、ご紹介しておきましょう。【『報徳記』37頁】

貧村を復興するために、報徳先生もまた、人手が欲しかったので「来民」を招いたのです。

民戸を増さんが為に来民を招き、之を撫育するの道、甚だ厚し。

むろん先生も、無頼の民であることを承知しているので特別に大切に扱います。

或人、問うて曰く — 「来民を安んずるは我が子を育するが如くする歟(か?)」

先生曰く — 「我が子は骨肉・分身の親みあり。来民は自然の親みあるにあらず。唯、恩義の厚・薄に依って進退す。殊に生国を去り、他国に来るもの往々無頼の民多し。之をして此の土に永住せしむる事、其の撫育、我が子を育するに倍せずんば止るべからず」と。

先生、撫恤(ぶじゅつ:憐みいつくむ)の厚きこと推して知るべし。来民、猶をこの如し。況や在来の民をや。貧困に迫り、一家を失しなはんとするもの、①或は田を開き、②租をゆるし、③之を作らしめ、④或は負債を償ひ、⑤或は米粟を與へ、⑥或は家を與へ、⑦農具を與へ、⑧衣類を與へ、⑨一家を保ち、⑩活計をなす所以のもの、盡さざるはなし。

なんともまあ、至れり尽くせりの大接待です。でも、彼らがひとたび村を離れて、食うに困って、山賊や盗賊になって村を襲うことを思ったら安い対応です。……とはいえ、それに応えない浪人や悪党たちもいます。

然るに、恵を加ふるの厚きに随て、彼の艱難・彌々(いよいよ)増し、恩澤を下すに随て彼に災害至り、救わんとすれば却って倒る。

面倒をみれば見るほど相手は難儀に陥り、恩恵を与えれば与えるほど災難に遭い、助けてやろうとすると返って不幸になる。一体、これはどうしたことでしょうか? 先生は、考えました —

先生、大に之を憂ひ、其の所以を考るに — 「枯木・幾度か糞培(ふんばい:肥やしを施す)すといへども其れ再盛を得ることあたはず。新木に糞養すれば速に成長す。無頼の民、積悪既に甚しく、將に亡んとするの時到来り。然るを猶、之に恩澤を與ふる時は彌々(いよいよ)恩のために亡滅を促すの理あらん。助けんとして却って其の亡を促すこと、仁に似て不仁に當れり。然らば、則ち教るに改心・勸善の道を以てし、彼、旧染の汚悪を濯ひ、改心・勤農の道立つに及びて恩恵を施す時は、新木を培養するが如く、災害を免れ、永續の道に至らん。又、教を重ぬるといへども、彼、改心すること能はず、爾々無頼に流れ道に背く時は、救助の道、施すべき所なし」。

仁が不仁になる そうなのです。彼らはすでに腐りきっているので、枯れた木にいくら栄養を与えても元には戻りません。彼ら無頼の者たちは、悪行が積み重なってもう亡びるほかはないところまできているのです。こうなっては、もはや手の打ちようはなく、いまさらどうしようもない。「仁をもって助けようとしても、返って、それは不仁になるのだ。いまは、なるようになるだろうから、恩恵を施すのは止めておこう」 — と先生は考えました。でも、そのまま、放っておく先生ではありません。

「其の亡ぶるを待て、その親族中、実直なるものを選び、其の家を継がしむる時は、是れ、亦、新木に糞するが如く積悪の報い既に尽きて再生疑いなし。嗚呼、今まで恵みたるは姑息（一時しのぎ・物事を根本的に解決せずにその場を切り抜くこと）に当たれり」と深く慮（おもんばかり）、大に教導を下し、改心の実業を見て以て厚く之を恵み、其の改めざる者は困窮極まり、他へ走るといへども之を恵まず。

「縁なき衆生（しゅじょう）は度し難し」です。如何せん、一生懸命に面倒を看ても改心の情なきものは、先生もあきらめます。これもまた、「仁」なのです。でも、「仁の人：報徳先生」らしくありません。どうなっているのでしょうか。

ともあれ、話はまた、「移民・難民問題も、背景の一つに気候変動があり、今後も深刻になる恐れがある」という、新聞の論説の結論に戻ります。

でも、気になる、この先生の来民に対する「仁×不仁」については、まだまだ、後日談があるのですが、それはまた、項を改めてお話することにいたしましょう。

【『報徳記』38頁以降】

【2025/05/26 都築正道】